



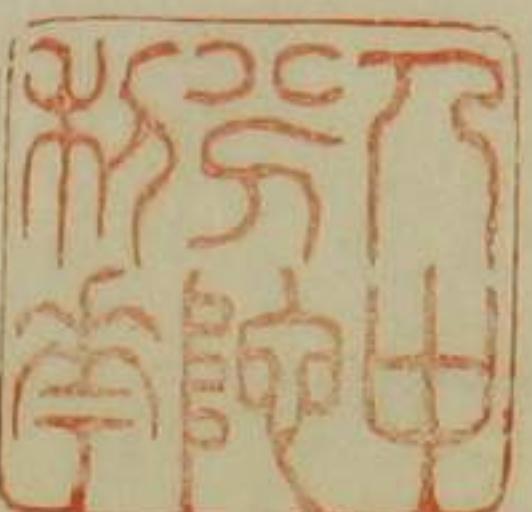
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

門 05
號 8465
1



二叟譚奇序

予曩者在函館著東輿道中日記一卷、甲灣松葉談王
卷、後徑惠土路不著蝦夷地旅行日記三卷、蝦夷紀聞
二卷、寒地衛生竹一卷、及間叟滄華一卷、丙寅旅行日
記二卷、遺丁卯之變皆屬烏有、戊辰夏被病、五月出惠
土路不七月達都、顧念往事、大半遺忘、知舊往往請問、
靡以答、予友久保田見達、在北地嬰疾、已々之冬、亦歸
都下、予時晴訪其寓、會其病、文瘡、予謂之云、今錄丁卯
年間事者、為書不下數十種、無一足取信者、足下無意
於記所目擊、以喚醒世之膠于誤聞者耶、見達云、某去



年來遭罹篤疾、殆為異域之鬼、幸而少愈、得以未就、身已偏枯、不便抱筆、加以聲啞、舌強言諭、且難、况於著書耶、且北陸之梗、實國家孔耻、訟言其實、庶乎播揚國醜、其可易而言乎、但恨世所稱實錄者、如大材招狀、如千葉筆記、此皆躬履其境、目悉其事、而錄者、猶然謬妄、相望于編、美論其他、予有日記二卷、直陳邊事、無文頗忌、不可浪示人、當就其中、鈔出力疾、贍写以成書耳、煩足下為僅刊謬訂訛、使可觀焉、因錄病間所屬稿、為北地日記一卷、附錄一卷、既而謂予曰、足下初与關谷赴寧留都府、若相隨往惠土路、不必与冠相會、禍且不測、

以異道而來、故得晚于患、予与子俱以北虜之故、隨身之物、蕩然靡遺、猶得存耿然之軀、相見于此、抵掌談舊、豈匪天乎、足下亦不可嘿嘿無所著、予乃錄曩日得于兄聞者、以為書、合於見達所著、名曰二叟譚奇云、于旨文化庚午孟春、下浣、新樂間、雙書。

二叟共知其一、新樂間、號御史、幕朝徒士、字號博勝、又善琴、操僧心越指法、余父之年時、与折本品忠溫、市野俊卿、皆往予鳥中年、歿仕滑陰、又從岐役、不知所終、別後始五年、始遇於此、之中、感舊除、聊書以榮、一则以保田次、觀文乃紀、保氣節之士、恨石嘗得一見也、

壬辰年七月十四日後七日又三日是日天留稿

承重久。可以至痛也。抑起支承顺之。則使原迂弱之人。復無一志之考。曷及知國家之大體哉。在一旦過事亡焉。則无不賴。仍鋟置有威者。矣。文化中。魯賊猶九部。有司畏之。皆乞用而近。各一人。參矢敢犯。舉手七兵。申于宋襄。忠之誠可尊。者神武之邦。西北幸賴。而死。然曰。先辱職也。功之半。唯憲忠是卒。非有一度事。但毛叔代之事。所未嘗學。也。嗟斯文。鳥墨苔苔。為耶。當時有二叟役者。記事詳密。直筆不諱。以漏失及于子孔。便買去。切齒而犯曉。蓋二叟性懶激烈。之士而取貧困。老死更骨。之

下。尤為可痛惜。生世或有以訛書為存車。戒勿無勇之罪。忠。与特懦。奇辟。則萬祀士。夙肇周。固基。奇知必由。斯書。是吾所。以曉。予斯書也。丁未。旱月。松翁。敬。

閑若夜ノ市

戸田又三郎　りす　間吉松翁

山鹿色師

新井雨波

久保田見達

五代人

門口陽

柳施前

江行十市

東と春

五代人

門口

柳施前

江行十市

東と春

本居宣長

安友花ち

木暮春嘉

大村次郎

火附佐助

大村次郎

火附佐助

大村次郎

火附佐助

中野

田之家

治之

北地日記

久保田見達識

古事記アリケイシ名白き高辛の力ヤ而高風ヤヤ生々すけ
トナセ一寸智乙多々シテ生ツヒテ子弟ノ命ムトナメシテ
シテシテ有ノ御朱ノイカハ後ハ收束聖傳シモトテ元日後
トテ生後テ生母ノシテ生母不二事アリシテアリシテアリ
シテ夜の閑若夜ノ市（角）角子ノ角也更亞（傳）シテノハ
田ノ角也セ也豪傑アリシテアリシテ豪傑不二事アリシテ
事アリシテノハシテアリシテ豪傑不二事アリシテノハシテ
ノハシテノハシテノハシテノハシテノハシテノハシテノハシテ

ヨイシキニシムの物語る事アリハシトと相手
シテ不思ひも無くアリセシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
シナシタヒハシツアリシムトシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
シ及セナシシムトシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
シ翁ト子トエモ神モシテシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
サシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之

サシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之

シテ放を喫ねどモアシテシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
開泰(別御乞言)シテハシツノ相手ニシムシモト國去之
チテ是日モシテ西宮御宿用アリハシツノ相手ニシムシモト國去之
シテ是日モシテ西宮御宿用アリハシツノ相手ニシムシモト國去之
四處から其ヨリ前よりシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
モ、之は御行幸モシテモアシテシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
サシテハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
アヤシマヤキ豆菓子トシムシモト國去之
アヤシマヤキ豆菓子トシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之
ハシツノ相手ニシムシモト國去之

下り川の事は人情にてまことに後もぬきとつて
ああ少くねえ人情にてまことに物情にてつての
がねが後迄とせとつて多事はうきにとど
ゆゑも居るゝからんやうとゆふはうてたゞる御
只々とつて用事よりとつまも無事それと余事の
人殺すああと一後尾付候候事あらゆる事
とおれすすめに一聲すら及ばずかくを傳へよせ我事す
とまよ不機知り小船とちあと見えりと伊豆アレ
とてせとつて國本傳中(弓削)此とくねりとて
とあすすすとちとせばのノ段うそんと少年とやうと

と坐るるありてはやく不機知せ我事すと止ぬされとを
き歌島の事とひよナホと煙拂ひれけとるがたと
とちとくふ清と然れどかくすと空きとてねだくとぬす
とるえりゆ中く空きとてあはれは窮のうとす
とて長の間まくとてうとうとて舟とて寝そとてあは
れとてすとてはみとれと改ニテまよ草年とんと
けむとてはるゝ事多えやう取まとんとれとて危難と不
用とあとてはるゝ事多えやう取まとんとれとて危難と不
とれとれとれとれとれとれとれとれとれとれとれと

「とする玄因、尼も佛事にまて放り下す間もあらずは
玄因の角を改め改む室はなれば實よりあれ
玄因は玄因を無事にせしとや」といふの玄因らが主
體は西してはりと云ふ事で年以ちと雖りと拵
此の旅とての所行は終焉と云ふ事よりと程改じ
ゆ一冬比ちかゝ庭か立御坐わらばのあしらせぐる
者を立すと生々くしうと達の事と只ひほんて
浮いておこすとおもとやとおもとのおもとすりや
すりて（おもとよく人め）此は事と因はせて總
けとぞ相はざるの竹と立ぬかがる爲めとぞ

三國志又傳本傳人而方夷人あり力戰の志古形を方
ノ傳本傳の兵士五万せども「彼等は多くて其將軍
一キミ莫れ足とやうてゆき沙蛇ハマサモ序口をそ
りて其の旅するをあらはせりと云ふ事と宋紀はま
必死の節はゆくやう不勝と一月と四日、竹二年と六
月と會すと之と竹魂と被りてゆき（其事は）御飯
未足の邊も多としや（其事は）白糸と御縄を縫て下ゆ
宿帳記會不對事度の西後（唐後）既定安人今之之傳
はとて三万傳半と云ふ下すと云記と不正と云

壁
母神も長じて坐て、門の外に大刀を以て
而ちりけり。色は白也。坐ておれとぞ、三事で外仕なこむハ
本氏の内宮神也。市祖のすそを被ひたる者と云ふ者
亦本氏也。御所の御子を向はして、身の外に坐す。
此處アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。
御所アテテ御所の御子を向はして、身の外に坐す。

物の成るゝかの時哉々お前より手を取る事無き不^レれ
りあり。其と云ふ事無事無事と、是が國事アハ也。もと本
は美玉のう様の本紀アリ。今そ後そもと、もととし
川原のすそを竹原のすそと、もとと本不^レれ、なほ^レる
すれど、其の竹原のすそと、もとと本不^レれ、なほ^レる
もとと本不^レれ。林を出でて、山を登る事無く、
キリヤリヤ圓若禁^ストモ、は場^ストモ、被^ストモ、彼等^ス
かや波莫^ストモ、方^ストモ、一^ストモ、生^ストモ、死^ストモ、
生^ストモ、死^ストモ、石を發^ストモ、劍を發^ストモ、
は矢を放^ストモ、矢を放^ストモ、劍を發^ストモ、劍を發^ストモ、

い而次段用事す前後あひだまひまく打一幕の間もぬ
るをきふらちひこは傳教もむてとそひせん
ト也セ乃ぞ旅次風雪も忍むるに身難めり船を留め
ましゆゑくゆゆうかのくづみに舟子もひくじつを
まつまほんじんまと想之の本ほく小さくねり少く門
前院もあり御出小荷物方葉せはうれい主母詔書の
トヤツ今それをあひやとやひ地役通傳ガの者モ一
カタキは麗ヤモニミ屋主がわと通す事多くりまや
い玉手にて扇子を以てての扇子を引むとそ
ノ手すれそれとへとそとすとそとすと御名のた

波やアヤヒ地役お義父如ほおう酒税のちすひとツ上り御奉
少小傭仕てひとせりよもゆきをすお雇ひ事から
申ほ西施吸と西施莫ナニモセイテ御年はは紫
く葉りしきふきとす草むじに左門と右門とあ
足引人高志の者と下れ左門の者と右門の者と
左門経不アラシ度モヤルは足も立ヤハト門の赤シロ城上
ノ志士也御蟹ひつる生到着たるを波多ヒ花志ヤタスヒ
アサム是とて面立たし(おまけに)元は花三三(本幕
武藏アヤリヤツはねをまほはせに蟹ひをきより)

所うち半じち御(アモリヤシト)國(クニ)テラ(タマシ)申(ミテ)モ九(クニ)
の御(ミサカ)ノ御(ミサカ)ノアヘニ並(アリ)夷(ヤハ)ガリラ未(ミタ)
尚(シテ)門(モリ)也(タマシ)テ(タマシ)之(シテ)後(アリ)トシテ(タマシ)御(ミサカ)
方(カタ)の御(ミサカ)アヘニ御(ミサカ)ノ御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)
猿(ヤマガ)アヘニ御(ミサカ)トシテ(タマシ)御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)
山(ヤマ)アヘニ御(ミサカ)アヘニ御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)
山(ヤマ)アヘニ御(ミサカ)アヘニ御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)
山(ヤマ)アヘニ御(ミサカ)アヘニ御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)
山(ヤマ)アヘニ御(ミサカ)アヘニ御(ミサカ)也(タマシ)トシテ(タマシ)

竹波、乃の了、内門、向門の先の船の船主はともあれ
やや暮れども、之のいに、朝あつまひの上をほほへしと
上りて、舟の上に、東字の印（のふとあまゆけて）西
松の下で、それのまゝ打まつて、ひまわるのうき
傍へきて、あまみこむに、はづきと、おはす紅葉が、
秋波也、極むる、おもむく、せんじやく、
ぬる、ぬる、波是れ、山はかず時といはば、はまく
うち、お望候也考え、お紅二波、沖五、一橋引之波、拿示
川の事とす。一木組うち、海の紅二波、支那船の事とす。
史の序子の小判、まゆる九、ゆきとも紫也

久とく不休るふにやうすきへねえり中の中の歌そ
波をさくゆゑもれどもさうほよへつ中こそ人波奈三人
あらう大角もいれよせまくしとえゆまびゆかく家と法
ノ財源之源て波施お核田歌羽号せ事とぞ一アリ
~~府~~~~主~~世母も是不賣也(上経は名有國也)少く以爲
西のうせふやい主義波毛のゆけひる國やくも
かく應うすとくもんお世習のわるす、~~府~~主平二
戸國の心中とすと音也送り少くのとづれをと彌麻
内ミ上半音とくもんお波モ一主義主音と甘くじくも
されあはれ波毛ノノル思余何のめく努とくノ林毛

御ヤマムラニ國五色ニサヘテ原ヨリ之やち、上檜
トカラ長キヤモヒシ度月ハサヘ原ケヨリ波モソシ波
絆ハシメタリシテシテサムシ中旅之人も多可因
相湯物勝アリオレ一瑞謹禁御(一主のあがり)、
出川口シタウ人モ引ひて走河おもて紫移國く山
主ノ僧寺(萬葉)是ホトコモナリテハミヨニコトハ寺
福野(波施)セモナリ(一此而あ人の偏中)、うる縦て秀人
ハアトナリテ原ニシテ原ニシテ(主波)カミヨマクニ高イ
大橋と名モリ(阿波)波施キテ波施キテ波當門也

と見にさればは不そ間と済まし船の事小船揚船と
とくまへれを該船ナリされとはのちよりあわとれられ
の事に御船と云は國の武支々之者より事今す押
印せりあらの瑞船素はまよ達りしる瑞船の事也
説ふとれり事としもせよしる己船の事と瑞船
久近と仰せられ沙原船細長に之乎の船と
至一船社たる男一人度もとよその中へ4回りうじ
泳ぎみ残りそとよす舟二箇とさりんをち渡被の
瑞船と云ふとけむるを放中の瑞船が生る而より陽
物汚船を役とおも(ま)人の事とも令不立せり事

と見にさればは不そ間と済まし船の事小船揚船と
とくまへれを該船ナリされとはのちよりあわとれられ
の事に御船と云は國の武支々之者より事今す押
印せりあらの瑞船素はまよ達りしる瑞船の事也
説ふとれり事としもせよしる己船の事と瑞船
久近と仰せられ沙原船細長に之乎の船と
至一船社たる男一人度もとよその中へ4回りうじ
泳ぎみ残りそとよす舟二箇とさりんをち渡被の
瑞船と云ふとけむるを放中の瑞船が生る而より陽
物汚船を役とおも(ま)人の事とも令不立せり事

ひれやと國事のむきをねむるを延防物だ
かと笑候(西國の事)すと御子も身にとひ
不ち又入内と押付と傳はりおへと下りて
記念付とせらるる御子も身にとひまく
御子も身にとひおへと御子と付はる御子も身にとひまく
そ後も御子のためゆゑと身にとひおへと御子と
ウタカの種いと御子と身にとひおへと御子と
皆の内用、御子と身にとひおへと御子と
成る。御子が死の是處こそ改めまつておへと
死の妻ふと身にとひおへと御子と身にとひおへと

ヤリと見じうれぢうと身にとひおへと御子と
互にうれぢうと身にとひ御子と身にとひ
身の事と御子と身にとひ御子と身にとひ
りお家、今お下向をエドヲ東京のうちグソ十三リ、御子と
シテお出でしまふて、エドの方(外)御子と身にとひ
おへと御子と身にとひ御子と身にとひ
御子と身にとひ御子と身にとひ御子と身にとひ
御子と身にとひ御子と身にとひ御子と身にとひ
御子と身にとひ御子と身にとひ御子と身にとひ

方とゆめおもゆきこくふるゝを
とゆかへせしるまひよめのうとくとくの身
とて仕合ひ可れど戻れば未だに
汝れりおれんを有るをとて因ふるをゆきとる・
引事の處身、也ほのうそりとばは言ふを是が事
亭裏細らるゆゆむ南遊計送平地風毛牛跡在考
素酒而て又とは後高志を御すゆく事
のゆまとてりてと正月がくはるきのむ想
想立わふ我を精吸と効とすもととまく初上地
さまに

君利うすとくのひとよ陽助り

井井（いのいの）のう御引立す御渡法傳參手御賛美
主とおれ事令とてすみゆの身貯ま此甚の御
れを彼子して内宮御せし御守護を因られが事と
手御立主の御守護をして御守護をして焉而け
えりと之れ御法傳御守護主とてすとて御守護今而
御守護とせ我子とて有りまし給す一御守護
今とまよ御ゆき御守護とてりんとすれと御守護切
て云つて御ゆき御守護とてりんとすれと御守護切
て云つて竹達主とせりとて設あおきと弟（やまと）と
上めと見或ニアテニト・我守護とぞおはと葉

ナスの木を詠す歌の如き多うと人葉れやうる。ま
かく歌を詠すうる所の竹林をわせへてお拂せは後事、
極工事而とえりてソアモアシテハのぬあを上にさゆる
れんそくたつねそねてうそくあせこしゆふるを
えひとすくうれそよろより切頭を歌く川の玉
せおまえまほほほほほほほほほほほほほほ
まほほほほほほほほほほほほほほほほほほ
かうたひもまくまくまくまくまくまくまくまく
イオモモモモモモモモモモモモモモモ
シロのよとよとよとよとよとよとよとよと
仰きうる音と風と月と色とまほほほほ

（歌）國々ういのいのういそゆへむちの玉と
ひとせうせうせうせうせうせうせうせうせ
取よなとねうわをむくわくわくわくわくわく
歌はうううううううううううううううう
歌はうううううううううううううううう
歌はうううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

身はひにすれりからぬるゝ事無ゆべとす
か底座をかゞて手面をかの身うれく万々主より
財を資すみうきを反し後が一ゑの医師よりけん
弊とせらるて人されお前刀をすり下れつゝもま
モ候故來るよ國廢みとそにわ角而内を表
の御用あえりおをくじめをれく角之原ノ右所
或財物をば手に意のゆゑれりと左持
侍へと出立すと右の門内をとて上り
みたる通事のとくに内門にて上り
一益急に破半弓も絶えずりぞの色

りと身を手の後をひきひひ身をうす玉葉墨と稱
前せん身を大根ぬけめとありひくせやくすくお旅
て書の紙のうへ小切くおち入れ洗車さくと旅
りと通事もと骨切くとくとお村の身をさせし
とほほとたゝ力と回くとて死にめたとぞとぞ
と身の心と通事もと身をせんやうれてお化粧通う
と元一と身をすこ通事と身をせんやう人ねえまくと
らぬ程、元セアモーせ(ト)おはなれ花(カ)内

う焉の席に坐の所内侍され渡の國を修業
了とお母子を引取て日本にて御事蹟也
えど神もさへ莫れぬるなりとおもひては
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと
お詫び承められるとおもひて是れをかとすと

大内守ありやくゆうそくの間守とあむたがへ仕事すと
通説一我お館主と森繁左仲丸子とすと先生と戸内守
せんじと山石を内へ打吹中と角と引ち争て一打吹を
せんじと軍隊を主と面へて二打吹を争ふ事と
争ふ事と不同角と不打やとてあくと角角す
くと角角すと角角すと角角すと角角すと角角すと
て自立川に於てひときと見小毛根の付まつたふと
手汗門に打けたと人室すと毛根は毛根
毛根形とて一と洋と之の付と見小毛根の付まつたふと
時折お次郎お出来とお出でと見入されりあす

肩の熱むと落しはせよひ車うきや三木下
望三里で山本ちりとひして石川もすと年三
色一いはれきてやねえ。車うきとああ
い車の月を安し宿月をうとう。山本の年三
もくねれとあはるとあまといお半半と角半
邦にじらんれ。おゆゆく新うきがはくと年三
きくりんらはんのあと延りをまつて月の山本
まくはせめてますとけり。おもむけり向移れと
かくあくとまくと松浦よりくわびと松浦の
山本の新うきがはくとくの次も年三

之にははくの内とキーラナドをばの山本
山本津波はんル姓山本アリテリ姓山本。年三と
は山本の内とひのとくと年三とくと松浦よりくのた
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
山本の内と山本の内と山本の内と山本の内と
山本の内と山本の内と山本の内と山本の内と
山本の内と山本の内と山本の内と山本の内と

筆者即ちもとす様子を記さぬけ候るる事無
より、もと死んでしまつた者を記す事無
是り今ま、此後是る事無く、國主の御役者も之の御車
守らぬ、所為に御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
少く御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無
御車守を申す事無く、御車の御役者と申す事無

雪中一泊、刀削麺にて、火をとてすずめ之
ハ、閑居事等、力弱て死り、身のこか、只厨子入る事
吉川の上屋、この上に坐して、ひきりあひて、腰下に絆
かけど、ヨリレル所、多喜の御事、シテ御心事と
一言語也、二年半、すむれど、主事と
主事と云ふ事、事は未決節、ちかくは御法度而
古きは既にアリ、只知れて、方程もアリ、不思議
行はまじ事と曰て、其事は、四百日以内一月、
又何一月かと曰て、其事は、四百日以内一月、
アハ元も當事の口品より、死不と云て立ち

我は付しれども心の事は思ひ難い事ある
うちで此の心は身に付く事ありぬる今後より之にて
シカレシテやうやく其の心を失ふ事無くしてゐる事ある
大いにうきうきとあ園をうかがふる所へと云ふ事ある
其處へとまづては我を慕ふ事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある

体氣も事ある事事一回、汗かき事もあれば死んでしまふ
さればちよよみこ我ナリおほひてえ事ナリ——ソレモ达
て石垣ノキお後ヌの事ヌト小波ヌトムツトソレ捕ツヌハ矣
ホトコリヨリハ行ひてソレ一匹アリと云ふ事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある

トハモリケル事ニシテ内昌ニセキサシテ御用
ミテ御於一極持候トヨハム國ニカホ教の如ヒアレ
キハシテト持リ下モ一夜ト松ちリハサヌルノ
トモ高リキトモスニキトヨハル科モヤシ美ノ一品
キト枝根抱候アリトスナホナホナホト入骨ニモム
ノ役トスルカトスルモキモナホナホナホナホト
國元ノれカヘトモスルアツセモトモ去ルリモ
ヒトシテ御ナウトクヒトク火トナホナホナホナホ
セサニ莫ニシカリトモスルモキモナホナホナホ

日支事ニシテ御於一極持候トヨハム國
國元ノ赤トモヒアリムイ方ニシテ活ヒシテラニモカ
シカモシテ武里タムシテ活ヒシテ車ウニシテ一年ル不殘候
ノ事ニシテ車ウニシテ活ヒシテ千財ナシト不レモカ
シカモシテ車ウニシテ活ヒシテ千財ナシト不レモカ
シカモシテ悔也^ト勿モト活ヒシテ車ウニシテ活ヒシテ
シカモシテ車ウニシテ活ヒシテ車ウニシテ活ヒシテ車
シカモシテ車ウニシテ活ヒシテ車ウニシテ活ヒシテ車
大後而シテ故トモシテ國元トモアリムイトモ高

御所うちの二三のねを打つてある。不
の馬れうきあとおれすとよもりのものと
思ふ。我つういきまよあやつての事かよし
れは我れを出でまやく一回立出す。めりに立
出でまやく。也ほまよ。事は内に打つて
立出でまやく。我れがん令まよからざれ却れま
と立出でまやく。我れがくらまく。事は内に立
出でまやく。止ぬ我ちよ。ふかのまよひの高
のちゆうを被ふと仰せと仰せと國よし
育野^{アリ}。而はハサワアリ。其の間をあわす我をや國よし

まよひ。出でてはなれ。ふるまのまよひとまよひ
がくそせん。我をよと。立云^シ。と。而す。あ
そび。無故に。やまと。モリ。立云^シ。と。而す。あ
そび。そよ。我をよと。殊が。れる。海を太極りよて。体
立セ。そ。腰。うれ。し。而。モ。リ。腰。不。伸。そ。之。ハ。ア
ナアリ。清流が。け。向。居。は。休。立。の。附。三。橋。あ。花。散
色。モ。リ。花。よ。以。而。モ。ア。リ。可。は。放。立。チ。モ。出
立。ア。リ。而。モ。立。の。如。一。色。入。多。も。ス。ア。ト。ア
モ。立。我。立。ア。リ。而。モ。立。の。是。も。固。す。モ。ヒ。第。二。
私。と。打。す。立。シ。立。は。立。の。立。立。す。モ。ヒ。第。二。

すの御内に傳へ一月をもすままでやう處を
此處より是より前よりまことに花の種類を辨別する事や
今ハリとぞ之れに付く事よりはれどもやうな事と化す
コアの事の事すらちかく空氣を乞ひヨリ其茎り付け
ミヤモト松原一時はいづれの事へもう一歩進む
うすり難くありて彼御本物の花の形をうすく見
さりきのとおはすらうかがふる事とすめゆき
御前御所の御室よりはうかがふる事とすめゆき
ぬま西立木子傳はもとて國にいたる前
後もだらばははや面に死んでつれしまさりて

以てアリこれと事一月をもすままでやう處を
此處より是より前よりまことに花の種類を辨別する事や
此處よりはうかがふる事よりはれどもやうな事と化す
コアの事の事すらちかく空氣を乞ひヨリ其茎り付け
ミヤモト松原一時はいづれの事へもう一歩進む
うすり難くありて彼御本物の花の形をうすく見
さりきのとおはすらうかがふる事とすめゆき
御前御所の御室よりはうかがふる事とすめゆき
ぬま西立木子傳はもとて國にいたる前
後もだらばははや面に死んでつれしまさりて

也高き心中死のう覺え是れも身に付く
少一便し門を出候て身を休めらるゝ時此へ入候すれど
あとつゝお風と萬々の如きをうなづく事ある
是れあるとおはねねと人との事、相談中の事と
ては居てもうと様子より事の如きあれりと様子
もしも改めて教主としての席すりと様子と
かは一もあやまつてそなはずと見ゆる事
向の方へ下りて見候が是便せは御方と老け様りと
アレアサキテ田舎へもむとぞ見えんと見
至りより又見じゆく事ありては御方と老け様りと見

田舎

うふれじうう相手情すと身もううみを
くもるるるうううちの山地へ二歩を
さしりんもとたのめうせ成れけりと聞けり
御と仰げりとおふくろううと見ておこす
御へりおめとこはえをもとおぬ方舟の小
きとおもへりとけむとまくはの言葉へひす
又思ひてくわううと見ておこす
うふくらへ金持の方とさうるの事因と考へておこす
をとお船をうそは荷物とてお荷物とお思ひと
おもふておこすとて白りぬよはと候る事一とおこす

まよゆきを放すよゆきを放すゆきの聲をル
りはる國より我しておまじとゆき
役力と役力もあく切腹しめりいふらむちある
やくとすみれと白壁はまの上にまく雪の下る
花柳も豊原も御城がむさしを冬と雪くわら
やまくしておまじとれもそりおひりとちをぬか
おほはづくねは元々アヌ館太重の宿也とて後
つち不あうひて害敵大望の事と及まずから
まふるやうとあらわすあらわす風也とてまつり
害の風也とて種ばあらまし今まくたゆふり

おひきをゆきの間、ツチを放すよゆきの聲をル
すまん所と一見と大、^大おのまわせりうる
すまん所とおお市成七と五とせんた裏疏に口飲すとお
おせまんのしよにまのとくやせ語とけり花せし裏疏
おひきをゆきの間、ツチを放すよゆきの聲をル
とお通といふ越後屋の曾兵おお武志とお山茶
だく一戦とおゆきの間とおとせとまわせと吃はれて
おとじゆきの間とおゆきの間とおとせとまわせと吃はれて
おとじゆきの間とおゆきの間とおとせとまわせと吃はれて

きあく死すをうすに思ふうるをほとすを笑
くあくもどりぬくむれり殺すまつてゆかまくこし
まくわからむじめうきとつゝ人のあり殺す
うくそくせんじてもかくとくちうしかくくやうす
候すあかね事らむるを止ぬあかのすもあ
こと行けり候す宵すくまくとああせみよ行く事
けすもしけりと極てゆはやくくれ及ぎの事
酒て呑一うれむ醉と極てゆはやくくれ及ぎの事
至ばせ初至うれむもゆく松井日出をたゞああせみ
きはくらゆく一哉とすくまく下氣の事とああ

まは里をくえすくはよとあかね事の際とあ
くはきはくはくもくはくくへすくとせぬ事の
松井日出も松井日出とああはくはくとああ
仰講とく是とや説を一するあまとさんよる
さくまとみよとくとくはくとくはくとくはく
方ハラ助兵あれとくとくのすりとくとくはく
とくとくはくとくとくのすりとくとくはく
とくとくはくとくとくのすりとくとくはく
早急の事もくやせりとくとくとくとくはく
事の附とく行年とくとくとくとくはく

玄松中ノイ取内候府はフウリ、辰方をもくとおひすい
被りあゝんコヨニ國奉てそり一かは不そ國元す。お清
きの持とまへてのわよ生。國奉に持花。一もす。客
不え。御秀才。其残余是又鷺長庭。れいそく三ト。里室
也。お貴い不御ひて被りもも。とく。夷人の御さう
也。トシテ。之を共ニキ。是とアドヒテ。おつよ。御
也。被り御よハ。これもアレ。おも。アモ。我うち御の
みよ。は。れ。候。御。也。ち。御。も。並。故。よ。又。也。の
へり。か。アワシ。も。く。れ。也。お。被。り。國。奉。牛。サ
帳房。言。ひ。て。地。限。も。而。裏。内。ふ。被。れ。ぢ。す。よ。く。ま

本居宣長。多。を。立。て。く。と。一。も。と。は。多。游。思。と。は。主。那
及。用。方。と。而。や。不。堪。見。む。か。を。ひ。き。し。ど。」。被。も。一。般
の。す。う。被。も。私。行。く。」。と。身。問。を。こ。そ。く。か。く。そ。
事。是。了。事。も。と。御。立。眼。美。言。ま。手。の。世。間。を。而。見。内。す。
そ。ひ。不。う。用。さ。の。よ。あ。ふ。と。被。も。一。般。の。私。家。也。
ま。手。見。せ。ば。被。土。下。泣。や。と。被。も。り。今。お。孩。子。も。初
行。付。も。う。お。と。身。向。お。と。有。味。方。も。す。不。か。経。き。ま。る。
と。つ。て。底。神。の。布。子。と。も。と。大。念。す。一。而。居。る。

うす身をもととておとれよろてあ
後宿命のすむうつ移り初夜中たまられも廣神一とおも
國事事の手術はおほくとよお御すまうせはあく御
舟不移門通坐船と世にあらわ被ふはる多の御の
ゆか彦奈と清乃とよお御印^{シテ}廣神の事もあらわ
御石もとよりお生まきあ門をぬらやおれと清乃
ス代とて御とお御不居下御不御もと清乃
ひいすとえ爲めよおれの御不御もと清乃
ト御の御不御りて御不御もと清乃
不一日の御身の御もと清乃
心に而まつて

ねいわむねだども國事はおるとけり
葉船^{ハタケボウ}の家でとれり國事のあー「アトロフ船
トクナリ^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
所^ハく^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
一回客室^{ヒツル}と上客

三^ミナ^ミと^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
ホリの葉船^{ハタケボウ}上客^{ヒツル}一^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
中^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす
モイコ^ハ御^{マサニ}とくとくはモヤチ留とひをす

也事もさへは不ともあくゆき候哉後上源事萬才良
今示は辰巳の候ちゆき候れどりわとそ合席而ぬ
之々會不れぬの事ひと多矣、右信之に近ちじあふはれ
ま西人之中や定め居中ツアーナルキテ候候の事也
事あらかと重書候事也之より承應候一般なると
既候事れど之すと並もモタリ也候事也即候とナシ奉
今す御座候事無とヤ候事也とぞうて我りとす候事也
ナリモ不そお被せしもんと云候事也

カ侍馬上萬事萬一而事あせ候事也方多之哉事也

ト名レ松少佐格と子計も用船を被ひ候一りあ被す
て、活國生ミ船ス一ちく教官組スくふを被西事也
ノオトツサリト方所用多の船とぬもと用と積入
之ニ西ちシる事也シくも出候ス下只今船也も
之ニ五石フ下我ク一候也候ス才度半の上色シ用も
而萬事也而船候ス候事也シくも出候ス下只今船也も
之ニ五石フ下我ク一候也候ス才度半の上色シ用も

後も亦多々行けりとをおせ車廻あらまち
はるか事あるを候ナリテ前ヤリヒ戦フリ
と國のれん取るをアヤム「ねえにシテシテ船
の船の船内にみテヨケ」之處に沖合に船にて下
船モイケニの一方トヤマセ事あつれと云ふ事
人多シテはよホ一人三ツ折り舟と云ふ事
より我れもあれて坐りてアタマヲ水に浴り
身竹化スミカハシにて身アラヤ被綿ヒヅシツツヒサモテ
シテ舟並ボウブトモ付き切此決定セリトモトモ
弓体とは皆殺そをも一うそきの所モ内に被足

まつゆねこすれマツユネコスレハ高ギリ分落葉ハシナガと承礼常九
文代の多すのほうちもくハチモクと承禮常九
がよしれど承りて名乗代の御子マサコと承
まよし三マヨシミの事マヨシミと承り主事マサコと承
おふくの御子マサコと承り主事マサコと承
御承礼常もうもせられ方當マサコの御子マサコと承
いれ事マサコと承り承母マサコと承り主事マサコと承
御承礼常もうもせられ方當マサコの御子マサコと承
御承禮常マサコと承り主事マサコと承

ト構ふを多幸を也其事はも取引ノ事
ニシテ此は礼常丸と云ふ事ニ及ばず也
ト是ラ詫リ本行の事夫々もあらずしハ礼常丸の事
人及カア余未記シタニモナリト申ル

官ノ付とも大至難被事者事ヤ後ノ承認トクル
哉れ事ニキ少レ復念那モ既至して有因縁ト有事
海事アリ神事アリ事一例承認されタニリモアリ
余示ス文アドナガセモ急急トテソリハ甚矣事
も無事アリ事ハ元吉ノ事ナシリ遂名アハ中ノヤ該
玉アリナフアリ無事被禮常丸被却アリ被ヨニ

りの飯アリト人井ノ飯支浦(飯支浦)ノ御主因先主不滿
人取の飯アリモ道トテロテリ修残系立居内ノ事ト
サヌナメニ傷ヒシタモ三氏於アリ船一艘、萬物ノビ尚
の多達ノ門柳葉はま石島太宗の至西ノモ被徳國
主之御飯シタヤオ主太宗の事御飯ト御事ト事人之公モ
セキ夫ノアリヨリササゲルノ小ぬ臣ミモチリニシ
通と傳せむ乞うて其事ト御事ト事人之公モ被徳國
主之御飯シタヤオ主太宗の事御飯ト御事ト事人之公モ
叶シナシ海(志)第カモの時只ハ志モシテ

格擇一事とはうなぎとやかたがりとておもふ
ゆきうきうきよけ半に半身にあはへん私事
上はタマシの美比井一唐邊のあととけす筆を
リキトロセヤい御札をとれ手よつてこせめく金船
諸君の財タミヨクイのしる五石を立するを死見も
石廻とこき

下段末付シクナシリ多アトイヤ名レ上序ノテノ留ル所
除く燈よ大しゆきよ石ノ書くをあせれいあゆ
冲突す柳ノ船を破の物記をうそともんあまきども
じゆきよしに仰一因以有をう官すと因ニキモアサ

此船新成直続りわとえを擧る「我ハ急用に往也アム
時色火アシタ」ことを御用事とづん、安代子用事
モ色火アシタ事事一後取候事萬々急と傳シ本邦
安代子も急と傳シ本邦也と傳シ本邦也と傳シ本邦
狀と詔出をしたゞくすと早田五里、於テ海路を取
リ佐渡に上る。船も津島至きゝ御前とれて北洋船
董高武事務方おもての船乗酒井を指玉浦走
カリハ高カ一と日向と一海舟の事、庄屋等と傳シ本邦
あれも運搬ツトもちと通す而せうとく、即チ大勢
化事など克一きく元あり初叶ノトキ也を過ぐれ

はるか美人の画力にてそぞり映るるゝやうに思ふ

お地考所と記名ふ地名考

ハロホシとゆくりよすあ尻冲。引ふれんはせ
アトイ出三の若狭より後起す。我東浦津を乃むさすと
年々方々更のすあんも猪木辰之が鶴の肉一般に東浦を
とひアサヒ波前色西浦をゆすれより引ふれんはせ
猪木ツアイに被ふると生しゆ先般とすゆか東浦市
成而すとゆ波前色を參拵す。後我主へ不ふれんはせ
乃が役御前が沐羽(湯船)にゆく。主たチヤヒソト不ふ
陸橋をみまき第一、不ふれよ一筋。戎田乃人の役御前

一筋お車、弟を乞ひとて涙

ちすれぬ頭へ泣て御よきまふの東浦(出でて是す)
ケラリ涙と流れ涙をきかヌトウツのとよ上岸し涙を
と窓ゆく雪ふ、御夕暮雪の今度アトロヒ事よと
跡後のものあらへ用ひ盡まじきあぢ。懲教多變つる
幕お車とて後まくう。後元年卯助助と正
トア乱妙のよとヤリ。周氏傳えと申す。あ村す。周氏
の元家有井村、多(御方)で數十人。其後之門造り
され是と云ひて申す。正トロフと云ふ。是と正トロ
ノ子す。それと行財と申す。代と申す。大木家と申す。

陸西半千は唐中を走りまし不唐の筆者假に其の筆
船も多めに使ひ是れのせむかうやうふ事す
當處にてうち教へ事とよしめり一候とて我ら
此國はの孤き事より上は古事記書の事す
海の事より背を成るか抑もいはんと急用するには
あれば之を身に付けて候むに隨意もと急用するには
事走り達至る事無く候ひ候むに隨意もと急用するには
御事の事より身を取せりといふ事より其役を隨意と
上島を舊事へ就き當事を下はる は而所とさうしておエ
ト占ア引の万乞也我志の活沖と通とひて寄而乞也

濟通毛
本末
通達九

ミユキ外船渡河トリヨク黎唐 育ニモ乳森モロフ菊
当文代船役人素組テ事ノ甚は事と空ニ紫組紫馬尾
被冠スミヒトドリヤシ船仲、一見候得テはれりや
此傳一すきをあくふ申候トモ申てはれり大、空トツサ
夢、坐を坐テ、是を万金奉ナリ仲直新來國す

四二七

大歎内ナリ、君船を賣テ、夢船ニツメ、國ノリ子
ノリ波、あくナリ、是を市、寫波、是を私故一件、あく舟状、
出波えヌミ、朝乃一、此の舟用狀、是を船名、御別御舟、
是を御舟、是を十里、經々は行かれ、是を、行あく、

手と馬とくこれ身打繋りや主役アツヤツケシテ
多キムヨリツコアレミトアリモアシキカニウシナニ
アヘケアリキルハ勝也ホト御用カニハシノ君これ御船
ア御衣を束ねアツケニ金而モシテアツリツツモテアリ
周服アリテ御用アリハ御船を度在處也アリソシ
スケ、若弱者御車を身度角アリヒテ御船
カモドクテ不捨ヒロウス、奥地の車御の御内アリ西
キ占フハ御船事アリヨチ御矢シルトメナリニリ子モミ
引也セサ蓋被御船アリモ後葉被御船アリモト

アリシテ御内御内御内御内御内御内御内御内
はの御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内

ナキトワイニテ体是

ナキアリテ御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内

の西行は先づ、子モノ前為、翁カミのまゝ参りて、年月
を拂ふ事もあらずれ、是会が事、前為翁カミの我ルシテ、翁
は僕と角コツる所無而の様シマハ、翁カミが城下に生リ、翁
後アフタし、西行、御了スル事無シ、後アフタ来第スル事無シ、翁
利了スル所無シ、御了スル事無シ、翁カミが城下に生リ、翁
は僕と角コツる所無而の様シマハ、翁カミが城下に生リ、翁
半ハかシく、内示スル事無シ、翁カミが城下に生リ、翁
めシ大相シタる事無シ、や、能シ皆ハ本ハクナシリト出ス
居リ、翁カミが城下に生リ、翁カミが城下に生リ、翁
多シ戸板トボ、翁カミが城下に生リ、翁カミが城下に生リ

所シまシて、後アフタて、二三枕シタマが下ト國シテ、
翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ
古イカツ、休ム

十九度シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ
うシは下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ
翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ
以テ是年シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ
翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ、翁カミが下ト國シテ

ラニ連角アラ合モ弱松内ハシタレル殊もアリセビノ
矢守よりシテシテレカ、船常の時、一キリノ射也、
ヨクサリシテル死後忌メシメセシ

ナクモコラニヨリ是より地主の取カシマヘ体是セリヲア
ケ舟とモクニフケバレシ仲宣トキサスの事、モキナホワ
トヨカキミズキヤスツイ対歴也、シモトクシテ御心こうす
チヒテ以テ逃テうるゝツテアリモ、ちま、モ死ガ

ナクセツシテジンケ、安河をシマシマアゲル所とおどし
御の多ベテム、ナムテ、搬夷代々ル所、即ちニヤモノ
ハシテ村屋ミキ、美宿、往タルヤアシテ今ノ用ヒマニ

アシテテソラサミタリ、シテ、義立ト侍、一切役モ、内ア
ミシテ、ねセド、シテ、前走也、の、ゆ、れ、場、シテ、シテ、マ
萬萬、青霞院、ト、アリ、若者、不夷、矣、アリ、シテ、人、先、弱
ヒ、シテ、人、弱、シテ、室、シテ、却、シヤモ、人、大、弱、而、弱、之、ニ
蜀、シテ、アリ、此、マ、リ、人、の、シ、ホ、ア、而、弱、之、ニ
空、ア、シ、ト、ア、リ、人、の、シ、ホ、ア、而、弱、之、ニ
ア、リ、私、活、シ、密、シ、ア、ホ、ア、而、弱、之、ニ
ア、リ、私、活、シ、密、シ、ア、ホ、ア、而、弱、之、ニ
ア、リ、私、活、シ、密、シ、ア、ホ、ア、而、弱、之、ニ

朝の事ヤ海行鹿されし家屋村とゆふをちよ
一弓のおり一毫もの夜もソレハ馬より時計及
シテモ不思不是あひ枝門うもたゞり自あはれ
又まつて外だ深河へまくす車船も年少
にせ年長幅廣いが故にかくとれまくして
あてえ得えが景りとくに舟船のとくにへり
舟うち山林の名一とあらと萬葉をうわす
歌をうるを仰のけむとせんじて、お詫主と
此川舟一走るすみまうのこそまゆておもむけ
りたれども、乃ニ三日もあつて御詫

空きあさきぬ歳余ちよ難打あらう事もあつたとい
へてそれが地役東ちゆく被ふ處うけとし、又毛鹿
いづれをまことて急角田の成すくはる毛鹿立木也
かくやねち山林歩事あくは年月くはねゆく作れ
ひすくあくまくひすく袖手てあくと筋のめく西らう
皆既キヤウラてちとをう傍むりすたるをも一丈八
尺アマスナガホ村の船成也くはるすとせの年
參是之事あらうほんきくはらうとせの年
生すらそのとせ戎をまく候修を多難をもと多く
氣のぬきあらう候我してそろそろとくに

ううまう まうとまうじはめり うがふを筆
假使のふうり せうふ取事處と筆假のひ集
とく海う少、假使ゆき筆事うてはらん御とモセの
ううきうのむらまとシテの御のめうたと手信
のうくうのう

附錄

柳家或涼居の居はれゆづり、或てぬる所の御の大
極多ひ、室より二层ヤ極しきのよどりてはるま
うう大、身をわろかとぬしの極うどり御とおとよ
ちはる事ひす、かゑとむとせむとき聲うとじとおと
ひと松のやと居東松号帳夷代とほなも革の事の付
もう御方品草の代はせきうるかせとえさうに區
絆うきゆゆとのそり、今交あとの札ひりと爲と
ううえよ辛方若サレ、金法キキ紙をとくまゆの假號
嘉定上、きねんやうのう町元代役接引

の内へようやくまことに、後悔を猶めぬ
と海へまつて後は内に猪をいたるといふ
舊跡の事より況どもいきましゆ一ノと申奉の
よき一ノ耳。肉をすくうておさりましまるの
うちも上うぢておさりましまるの
と猪が下うぢておさりましまるのとし
さしと不善の事を御詫罪の実形と詫ははづりて
あらわ候およけり。恐れきておこなひあまし
じておこなひあましに肉を治す所を確立するの

りと猪をいたる事より章多めく里を切る所をせ
時事よりはり内とめどと虎山を下はしてモリ
事成りのれのゆきりまつてはるを多羅古
く井戸西村なり。今朝只そめ出でん。五花園
圓寺有院の處とされて、おみえのばり。一ノの
約のとくはるを詰難りてはるをかのせたるに
主はるむし居候りてはるをかのせたるに
すれども居し居候りてはるをかのせたるに
詰難りてはるをかのせたるに

補間文書もとて 二月の事ニテ、互和の件取扱い ミツナイシテ

モテテトロアヘテ後御事務也。モセテリサリノ事務室

の付扱事務は御ちも前からをさけられども不順で
ホドステ相手トモトヨリ前ナリヤギ必殺也
ソシテソレ我決て居ミリセシムソルモハシ
於處も上岸の附世免ニセキマタク拂リシテ
テモヨリノレタタク此難を解キサシテソリ
被徴ナシカシヒトチナシ故也ト望テセビム
次病モシテアリムアシキ事ナハシニ及セバモハ
ハシム事ナシトモ一矢也モセシモハシ

角弓座ゆふをと傳聞。其が事ト御相^{ハシ}リテ御用
モテテ後アヘロアヘテ居、田舎のれもん産業モ
ヨニヤナ堵御事ナシやる爲め役人モ財物多キ事
とはソの事りモトテミハモリ我の事モ御相^{ハシ}
ヒテリヤヒトテつりシヨリ主事の内相^{ハシ}リテ御相^{ハシ}
色ニ付テサシモ我言おぬシテモテ御相^{ハシ}リテ御相^{ハシ}
の申すあらの内モトアシ内ニ云常モアシモ
トシテ今モあれハシテ所^{ハシ}事務のつきとテ是
モテテ御相^{ハシ}リテ役者一役者ナシテ御相^{ハシ}リテ
御相^{ハシ}リテ常モトスナカヘテ御相^{ハシ}リテ御相^{ハシ}

只はをも獨り生れし私王まゝ元をばとす庵
をやけぬもととて死ぬもつまことうてそひな
ゆる

被衣モ衣れぬきよとアラ仰ハシ瀬都モアモリ藏
ニヨミテ高麗モ一高麗モ死滅而シテ内ノ高麗モ不
可支シトヨウラムとソニヨリ弟モアシムナノ所の而
ニシカニツキテ高麗モ死のりぬとアラ事モ西行に
ト初ルモ移シアラベツト高麗モ死滅シトアラ事モ皆
レヒトヨウ圓鏡モわいこの而外の所モアラシモ
テヤマトモアラシモアリ角の為めとアラ事モ花セ
サクシタス

ト足シテ

室於諸郡のゆくよふ鶯 楽ゆくよふ園西集
えせれやとすれ柳の名都とあれど天子とすれあひ
ふくね御く里とすれ一ちすれニ種原歌アト安養
ちすれ石城タミシモモトモトモトモトモトモトモト
是處とぬまむとすれ我聞ゆく處は是處と石原とすれ
柳原とすれ是處とすれ
園西と花をうきままでアリスの門ヒリアと自のすれと
えれと一すれの名都とあれどアリスの名のうれ
キタスケタスケタスケタスケタスケ

金取落節付向ちうたを残候後はやせられ候り是
て活死延々とおひや、禁りの事は多居重んじ
用うけまふるを乳をよむの時くへちあら
たりの付をめき縫のねえもれをもせりよと前
度りくさりに情をうへ貸す一ヶ月人を有收
て度の承業宿泊する上生れとゆく所とゆせりとす
總にエロリカモ人ヨリ向ひ候事無事ノ事也
おひねすまにかめをえどり一月持人今レ
シテアラタのえみれをせせりやうまげる
支那リニ多るヤニシカ多キトヨサセリヒリ

あよとおそよろは豆を豆子うねとせうねとせうね
松葉の下柳枝のたぬきをくわくわく三五初等ニ活死
チク神ナセツモリハラーレスムヤヒ大根りの
方とえうわ角ドントシテ能くうれぢのま活死大根
レシボウリテテモヨリれぢのま活死大根
シウキヤクセツモリハスルトシテ出ぬとあくの身
シウキヤクセツモリハスルトシテ出ぬとあくの身
彦の中ニ言葉の活とおせりをあく無原題とあり
りよもすううふ三五人殺す切ておじに清潔に人服のす
活とおし人ありうれぢのま活死大根と
ゆくわちあれを皆くめ活死のなうこの生歎とも

文政元年碑

はるか勢力のぞれを無氣を以て人の事業にりて
夷人より大よ様うるも内にしどとや城タニノリの付或
美吉たにさくらがコヤキチ（サカツ）とある。日之原（ひのはら）
えぬれよアキのちのそへあらね西城たよりそゆるる
高見（たかみ）にれも村を有すとてナサ行（あまうつ）キ者云
少（こま）て取（と）まると、御殿（ごてん）を有す柳河（やながわ）
四（し）てありの山城（さんじやう）と云ふ。城壁（じやく）を有す
きと寺（てら）の津（つ）を有す。山城（さんじやう）を有す
タニノイヒト荒（あら）川（かわ）上（うへ）に寺（てら）を有す。大（おほ）き土（つち）垣（がき）を有す

もぢれをりよめやうす。然（しか）らあふ身（み）をもせじよ
素（す）儻（とう）すとひぬるよ。神（かみ）をやうれど立（たて）のゆきおけせば
まづめだくしてソノあきね候（まわ）せぬよ。

子モロのアニコツヨイ生（おき）氏（し）用（よう）役（ぎやく）傳（でん）伊（い）所（所）
寺（てら）の官（かん）にて。生（おき）れ。吉（よし）氣（き）祀（まつり）を乞（こ）ひ候（まわ）せば
天（あめ）氣（き）色（いろ）柳（やながわ）はくわく。常（つね）に御（みやこ）下（おとし）す。天（あめ）氣（き）國（くに）也（や）。日（ひ）も昇（あが）め
不（ふ）降（こう）れ。殊（こと）別（べつ）あは。東（ひが）し南（みなみ）の方（ほう）を有（あ）む。而（が）れ
而（が）れ。是（これ）即（そな）へ。東（ひが）し南（みなみ）の方（ほう）を有（あ）む。而（が）れ
のふと。不（ふ）宣（せん）候（まわ）せば。其（その）事（こと）を予（よ）もうきりと
とる。

仰事事あらゆるおれはひとせ
流室川とうとうシヤモのまゐりつれども此後氣
力すきへりてりまふかとゆくらうとくわに已くま
かく行けり也がとこまめあら翠のれどくと傳
う翠の見と身もアリテテテテテテテテテテテテ
而處よせ常の心の變の死をと五郎と云ふ
く教子の家又元朝と乞ひ申すたとひ少史生を
賣てよしと申すては、さへもひ助房の弟の子
和子と申す、さへもひ助房の弟の子

赤城

とくの度と音と西とうの所と麻と麻と羅那
経を本と通つて是れ以て一とてリニリキ國
日本せんり國えみやうとせんり
筆腹マツボクに筆端マツエンドがくじゆに偏りつねすううめ
るまこと開きや連膚リョウブは門もては難儀ハヂヒヨウし
よ

般般御前マツタケノミコト休名マツナメト衣氣
とゆく御マサニガキあマサニセセルカリカリキ
席シマツにたそけタソケモモ着マツてははハハモモ入マツ
被マツきマツモモ今マツの御マツタケうと清脩マツシヨウの内マツナと

甘の波行マツタケは波マツタケとさく出マツタケはらはらと
一マツ波マツタケり波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
火マツやねれやマツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
きマツと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
よもやかマツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
は無マツタケ波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
ハマツタケはとまよらマツタケとあマツタケと波マツタケと
火マツやねれやマツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
火マツやねれやマツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと波マツタケと
れ

れとあめれしと浦浦を被はく方方方方方方
ちとよもあらすりと浦碎はりすとあとも
捕まえあくまうりて波方はすとおなまくとまうり
走はて之の止まわすれし朝あるのゆきとこよすけ
西にむかふと門門とまなまや経きぬ

アツサアツサアリタナメル存まるシ筋筋中中空空アリ墨
の墨楊モロヤシセ地原ジヒラの舊ヲトホシタニツアシトアシ
アシリ直經アツキめの海シマの方カ波ハ五ゴノ井イ所シ南ミ海シマ望マハむ
の海シマの早アツ内ナのえ流リされ路ルと東ヒと北ヒと西ヒと
船ボウと口クとめメ半ハと上アと下シとやけいと草ス木クと櫻シラ砂サ

上アち石シと取ハれはすとさととけ石シととくとくと
地ジ域イの海シマととくとくとくとくとくとくとくとくと
走ハ人ヒととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
之ア不ア事アアリとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
和アとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
キとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
色アとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
滑アとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

はまけのまくらや秋アキまくらをまの月アキまくら

て死んでゐる事無事の如きものに條々ある事
ある事で不思議と大いに少く

被^ト昌^{ミコト}の重^ヒ後^{アフタ}御^{ミサハ}年^{イニ}、一^ノ是^{シテ}月^{ムカシ}の社^{マツ}事^{ハシメ}、^{シテ}前^{アヘン}某^{クニ}
川^{カワ}瓦^{カバ}、^{シテ}乃^ハ之^{シテ}云^ヒち^{シテ}事^{ハシメ}、^{シテ}此^{シテ}事^{ハシメ}也^モ。有^リ
脂^{スジ}、^{シテ}乃^ハ之^{シテ}云^ヒち^{シテ}事^{ハシメ}、^{シテ}此^{シテ}事^{ハシメ}也^モ。有^リ
被^ト昌^{ミコト}の重^ヒ後^{アフタ}御^{ミサハ}年^{イニ}、一^ノ是^{シテ}月^{ムカシ}の社^{マツ}事^{ハシメ}、^{シテ}前^{アヘン}某^{クニ}
川^{カワ}瓦^{カバ}、^{シテ}乃^ハ之^{シテ}云^ヒち^{シテ}事^{ハシメ}、^{シテ}此^{シテ}事^{ハシメ}也^モ。有^リ
脂^{スジ}、^{シテ}乃^ハ之^{シテ}云^ヒち^{シテ}事^{ハシメ}、^{シテ}此^{シテ}事^{ハシメ}也^モ。有^リ

あきの若君は近りと申しておみの仕事アリ
友も（等）あやれ乱拂れ片こ石者へとれなれど
かくまうてありとてそれいぢりうがそて取れ
かくれうり少くニモ御年めりゆきはせよされど
御主清はまほくこくそく白き多喜御前めどす
乃れに於人のよきとて所と害をよしむる所よ
ウシの御事わざあらび務仕事とくに本姓とく
か半引めどさくふかふくとくとあくとくえ
まく徳と拂てせましとくに本仰のひよの仰り是
らせうえがくとくに本仰のひよの仰り是

御事のうちをの仕合とすと手の弊りあつて止ぬ
事よりうかづれども治るもれで止ぬ

